

〈研究ノート〉

母性看護学実習を多数の施設で実施する教育の課題
～担当した教員の経験～

前 田 隆 子・鈴 立 恭 子・井 田 史 子

Takako MAEDA・Kyoko SUZUTATE・Fumiko IDA :
The Educational Issues in Maternal Nursing Practice at Many Different Fields
～The Experience on Nursing Faculty～

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第78号 抜刷

2019年1月

〈研究ノート〉

母性看護学実習を多数の施設で実施する教育の課題 ～担当した教員の経験～

前田 隆子¹・鈴木 恭子¹・井田 史子¹

Takako MAEDA・Kyoko SUZUTATE・Fumiko IDA :

The Educational Issues in Maternal Nursing Practice at Many Different Fields
～The Experience on Nursing Faculty～

多数の施設で実施する教育の課題を明らかにするために、担当した教員の経験を調査し、今後の教育の示唆を得ることを目的とした。教員3名にグループインタビューして得られたデータを逐語録にし、質的分析した。結果：得られたカテゴリーは5であり、サブカテゴリーは13であった。『学びを促す指導と環境の中での良い実習体験』、『学生の乗り切る力』が見られた。他方『改善したい状況』、『学生にサポートの必要な状況』の臨床と協働して取り組む課題と『担当教員が取り組む課題』が明らかになった。

キーワード：臨地実習 母性看護学 多施設 教員の体験

はじめに

本学の母性看護学実習は多くの施設で実施し、施設は総合病院、あるいは単科のクリニックである。また、施設側の実習受け入れの経験はこれまでに学生実習を受け入れた経験のない所、あるいは既に多くの学校の実習を受け入れている施設など様々である。

母性看護実習の初年度において、同行した教員の経験から、本学の母性看護学実習の課題を明らかにし、よりよい教育の構築をめざすために、調査を実施し、今後の教育の示唆を得ることを目的とする。

1. 方法

(1) インタビュー

フォーカスグループインタビュー（以下 FGI と

する）であり、インタビュアーは本年度母性看護学実習を担当しなかった教員が行い、静かで、自由に発言できる環境を設定し、約1時間行った。

FGI は、ICレコーダーに録音し、得られたデータを逐語録にし、質的分析を行う。

対象者は平成29年度の母性看護学実習担当教員の内、同意の得られた3名（3名の教員の本学での臨床実習指導経験は2名が3年、1名が2年）である。

インタビューガイドを以下に示す。

- 1) 受け入れ側の課題
- 2) 学生の準備性
- 3) 教員の指導上の課題

(2) 研究期間

平成30年7月31日に実施した。

(3) 倫理的配慮

研究協力者の安全性確保のために、録音は直ちに業者に委託して逐語録にし、個人が特定されること

1 鳥取看護大学看護学部看護学科

のないよう細心の注意を払った。

予測される危険性とその対処として、個人、病院が特定されないかという不安が生じることが考えられるため、個人、病院が特定されるような表現は避ける。

その他、協力は自由意思で行い、協力できなくても何ら不利益を受けることは無いことを保証することを明記した説明書と口頭での説明を行った。本研究は鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（申請番号 2017-8）。

2. 結果

平成 29 年度 1 期生 76 名の母性看護学実習の実施施設は総合病院が 7 か所、クリニックが 5 か所であった。これらの施設に 5 名の教員が出向いて実習を担当し、常駐した。臨地実習施設にはそれぞれ実習担当者が決められていた。

施設側の実習担当者と教員は実習開始前と終了時に連絡会議を持ち、実習目標等の伝達・協議を行った。そこで展開された実習の状況を出向いた教員の立場で感じ、気になった内容を洗い出し、実習上の課題を明らかにしたいと考えた。

(1) 実習施設の概要

1) 実習施設における分娩等の状況

クリニックの中には、1 日に 2～3 件の分娩があり、ベッドの稼働率が高い施設、他方病院の中には分娩数が少なく、入院している褥婦と新生児の居無い日がある施設など様々であった。

2) 実習期間 2 週間の学生の配置、および受け持ち対象者の状況

施設内における学生の配置は①病棟に 2 週間配置で、内 1 日外来、②病棟 2 週間で、その中で 1 週の褥室と 1 週的新生児室配置、③病棟に 1 週間と外来に 1 週間の配置等様々な形態であった。また病棟内で 1 組の母子を 2 名の学生で担当し、母親中心の実習をする学生と新生児中心の実習をする学生がいる等、実習先によって学習環境にはかなりの違いがあった。

3) 実習指導者の状況

施設内での実習指導者の関わり方は①実習調整役割とカンファレンスでの助言であり、日々の直接指導は、日替わりで、その日の患者受け持ちナースとなる施設、②実習指導者が毎日いて、学生が受け持っている対象者を受け持ち、一手に学生への直接指導をされる施設等様々であった。

(2) 母性看護学実習担当教員へのインタビューで明らかになった実習の現状と課題

インタビュー内容を分析して得られたカテゴリーは 5 であり、サブカテゴリーは 13 であった（図 1）。

以下文中ではカテゴリーを『 』、サブカテゴリーを【 」、コードを《 》で記載する。

1) 学びを促す指導と環境の中でのよい実習体験

『学びを促す指導と環境の中でのよい実習体験』は【実習場での指導者による学びを促す指導】、【実習場での学生の自主性の尊重】、【見学実習による多くの学び】であった。

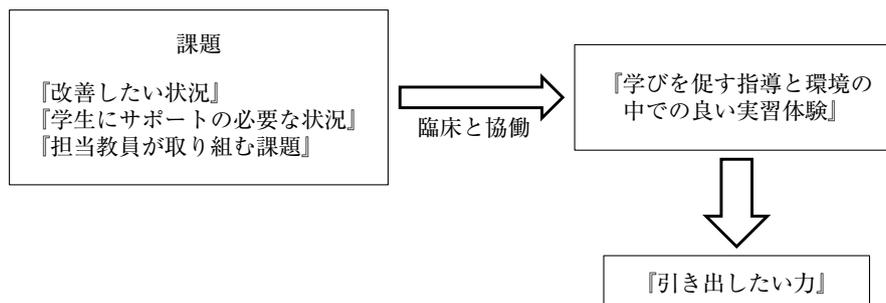


図 1 明らかになった実習の状況

①実習場での指導者による学びを促す指導

【実習場での指導者による学びを促す指導】は《学生への助言は、本当に的確にされていた》などの適切な助言、《いろいろな事を聞きながら指導》など質問しながら気づかせる働きかけ、《「なぜだと思う？」という問いに、調べてくるとプラスして教える》などの学習を促す意図でされる質問がなされていた。

②実習場での学生の自主性の尊重

【実習場での学生の自主性の尊重】は《保健指導したいって言った子は、ちゃんとパンフレットを作って持って行ったらさせてくださった》など学生の主体的健康教育の実施、《自分達が思うような援助を展開したらいい。計画し、指導者が付いていたらできるっていう形で》など学生が計画したケアの全面的な実施の許可、《受け入れようという気持ちで対応してくださっているのを感じた》など受け入れる姿勢であった。

③見学による多くの学び

【見学による多くの学び】は沐浴見学、《赤ちゃんも見、お母さんも見みたいで、いろいろと見学した。外来も行き、母親学級とか、ベビーマッサージも見学した。あと、帝王切開も術前から全て、術中、術後、オペ室にも入らせてもらった》など母子ケア、母親教室等の集団指導、帝王切開前後の見学、外来での妊婦健診の見学、および産後健診の見学等であった。

2)改善したい状況

『改善したい状況』は【外来実習の時期、期間の配分による学習効果の差】、【初学者である学生の指導に対する理解不足】、【実習指導目標・方法の臨床との共有化が図られていない】であった。

①外来実習の時期、期間の配分による学習効果の差

【外来実習の時期、期間の配分による学習効果の差】は《〇〇病院での外来は1日で、交代で行った》、《1週間外来と1週間褥室実習の病院もあり、1週間外来はとても長かった》などで、1週間の外来実習は長く感じ、《助産師外来では、子宮底長測定とか、エコー見学とか。いろんなことが勉強になったと思う》

など助産師外来での実習は勉強になると感じている。

②初学者である学生の指導に対する理解不足

【初学者である学生の指導に対する理解不足】は、《沐浴、ベビーのバイタルサイン測定、そういう事を一切させてもらえなかった》など学生にケアを体験させようとする配慮が少なく、《学生が、単独で話に行ったりする事を「善し」とされなくて、お母さんを休ませてあげよう》など学生単独での訪室は休息の妨げとの理由での阻止が見られている。

③実習指導目標・方法の臨床との共有化が図られていない

【実習指導目標・方法の臨床との共有化が図られていない】は《質問攻めで、それをクリアしないとさせてもらえない》など質問に答えられることが実習できる前提であり、初学者レベルではない高度な質問、および技術についても出来るレベルまでの準備が必要と考えられていることが問題であった。

3)学生にサポートの必要な状況

『学生にサポートの必要な状況』は【不安、緊張、無理といった気持のバリア】、【学習課題に取り組めない学生の存在】であった。

①不安、緊張、無理といった気持のバリア

【不安、緊張、無理といった気持のバリア】は《既実習を終わった学生の経験が、すごく伝達されていて、もう学生が非常に緊張していました》など緊張、《新生児に「怖いから触らない」という》、《あれも見、これも見っていうすごい。そういうので、もういきなりハードルが高くなってしまって、難しいっていう気持ちになっちゃったりするので》などであった。

②学習課題に取り組めない学生の存在

【学習課題に取り組めない学生の存在】では《何とか事前学習、うん。書くのは書いてるけど、それについて聞いても答えられないっていうのは、やっぱ頭には残ってない》など答えられない、《どこの施設でも「本当に忘れ切っているね、あなた達」みたいな感じだった》など事前学習の不足、《変化とかっていうのは、本当にわかってなかった。産後

の変化とか》など産後の変化の理解不足，《指導者さんが「すごい大変だった、積極性も無いし、よくなかった」って言われて》など実習に身が入らない学生の状況があった。

4)引き出した力

『引き出した力』は【学生の乗り切る力】で、『結構勉強した』って言っていましたなど頑張れたという自己評価，《指導者さんから「よかった」って言ってもらったのは、すごいよかったかなあっていう感じ》など指導者からのよい評価，《受け持ったお母さんからいろんな言葉を掛けてもらって「がんばってよかったなあ」と話していた》などの対象者からのよい反応，《「積極的だよ」って言われた》など積極性を評価された学生もいる。《意外と学生は勉強していたので、質問とかにもけっこう答えられた》など学習の成果，《指導者の言葉がきつく、へこんで3人泣いているのを見た、全員で励まし合いながら、乗り越えている感じだった》など学生間での励まし合いがあった。

5)担当教員が取り組む課題

『担当教員が取り組む課題』は【学生の感覚を受け止める】、【教員の役割の確認】、【臨地実習の目的・目標の共有不足】、【担当教員による事前準備】であった。

①学生の感覚を受け止める

【学生の感覚を受け止める】では《命の誕生に立ち合わせてもらって、感動、そういう表現が出てくるかなあって思ったけど、出てこない》など出産に立ち会って、感動という言葉が聞かれない，《あとで振り返ってみた時に、ああ、やっぱり生命の誕生ってすごい事だなあって、思わなかったかなあって思う》など教員の思いと学生の思いにずれがみられた。

②教員の役割の確認

【教員の役割の確認】では，《何が着眼点なのかをきちんと学生に持たせてから行かないと、難しいと思います》など学習のポイントに気づかせる，《教員が付いていて、橋渡しをしないとちょっと難しい》など臨床への橋渡しの重要性であった。

③臨地実習の目的・目標の共有不足

【臨地実習の目的・目標の共有不足】では《「母性って厳しいものだよ」っていうのをその「かわいい」だけでは、母性看護ではないって、私は思っている》《私、技術はね、いらないと思うんですよ》など実習に求めるものが教員間で違う。《異常が多くて、その異常の方のケアはどうするかっていうのは、ありました。大学の教育としては、どうするか》など異常な症例を受け持つかどうかの方針が示されていない，《NSTを即装着し、全部できないといけないというのは違うかなあというのが、なかなか説明しても理解してもらえなかったので難しかった》など教員の戸惑い，《大学教育としてどうかっていうのも、すごく師長は言うておられて、専門学校とどう変えたらいいかっていうのが、すごく言うておられるところだった》など臨地実習指導者のとまどいがあった。

④担当教員による事前準備

【担当教員による事前準備】では《現実的にそこまでのシミュレーションをして行けるかっていうと、人的に無理。その前の週の金曜日にたった1時間しか無いんです》など事前学習に付き合う時間がほしい，《1回ね、キッチリと前もって見て、学生のレディネスも確認して、このグループで本当でいいかっていうところで臨んで行かないと大変かなあ》など学生・グループの事前把握であった。

3. 考察

母性看護学の初めての实習を多施設（総合病院が7か所、クリニックが5か所）で実施し、教育としての課題を明らかにすることを目的に本調査を実施した。

戸田は「学生の看護実践能力を育成する授業の一つに臨地実習がある。臨地実習とは、学生が直接かわり、その過程を通して看護とは何かを実感を持って理解する授業である」¹⁾としている。実習をこのような意義あるものにするためには教員と実習指導者が協働して、学びを促す適切な刺激を送る必

要がある。

カテゴリー『学びを促す指導と環境の中でのよい実習体験』は【実習場での指導者による学びを促す指導】、【実習場での学生の自主性の尊重】、【見学実習による多くの学び】であった。まさに、よい実習が展開でき、成果が上がる状況であったと推察される。

カテゴリー『改善したい状況』は【外来実習の時期、期間の配分による学習効果の差】、【初学者である学生の指導に対する理解不足】、【実習指導目標・方法の臨床との共有化が図られていない】であり、改善を要する状況が一部でみられた。臨床との関係性の構築、決まっている指導担当者を含む日々の直接指導スタッフとの関係性の構築に向けて、継続的努力をしていくことで、実習の受け入れ姿勢・体制を変えることが可能ではないかと考えている。

カテゴリー『学生にサポートの必要な状況』は【不安、緊張、無理といった気持のバリア】、【学習課題に取り組めない学生の存在】であった。気持ちにバリアがある状況では思考力が発揮できない。また、説明を受けても情報が素通りして、残らないことが多い。実習の場に立つ学生の心情は、母性看護の特異性、知識不足等から生じる潜在的な不安、また、全く初めての環境に、居だけで精一杯という緊張状態等様々であると考えられる。

指導者による一貫した教育的意図を持った関わりが重要で、指導案の詰めが充分ではなかったと考える。学習は本人がやる気になるところから始まる。神郡は学生に必要な援助として、「問題を共に考え、自由な発想を伸長して看護の本質が理解できるように助ける教員の援助が特に重要²⁾と述べている。学習課題に取り組めない学生には指導者のきめ細かな対応が求められるところである。この課題は、教員と臨床の指導者が協働して解決の道を探していく必要があり、教員の努力が大きいと言える。母性看護の特異性からくる戸惑いは、異常ではない対象者への関わりが大半であり、他分野での問題志向からの切り替えを要する点である。

カテゴリー『引き出したい力』は【学生の乗り切

る力】であり、学生のやれたという満足は自己効力感を高め、さらに学習意欲が高められる。

カテゴリー『担当教員が取り組む課題』は【学生の感覚を受け止める】、【教員の役割の確認】、【臨地実習の目的・目標の共有不足】、【担当教員による事前準備】であり、解決できる場所である。まず、実習に関する目的・目標、指導案や記録の書き方³⁾などのきめ細かな検討が必要である。

今回明らかになった母性看護学実習の状況の全体(図1)を確認し、教員の課題、教員と臨床指導者の協働による取り組みの必要な課題を整理し、学生がよい実習体験を展開できる環境を整えたいと考える。

まとめ

今回の研究で改善したい状況、学生にサポートの必要な状況、担当教員が取り組む課題が明らかとなり、臨床と協働して学びを促す指導とよい実習体験が展開できる環境を整え、学生の引き出したい力を伸ばしていく関わりが大切であることが明らかとなった。

質的分析に、ご助言賜りました諸先生、ならびにインタビューに協力いただいた先生方に深謝いたします。

また、本調査は鳥取看護大学研究プロジェクトの助成を受けて実施した。

引用・参考文献

- 1) 戸田肇「大学と臨床(病院)との共同による実習指導の検討」, 日本看護系大学協議会 広報・出版委員会編『看護学教育Ⅲ』, 日本看護協会出版会, 2008, p. 12.
- 2) 神郡博「実習における教育方法を考える^⑩」, 『看護実践の科学』42巻3号(2017), p. 41.
- 3) 佐藤みつ子『看護教育における授業設計第4版』, 医学書院, 2017, p. 186.